

巴の神話学 — 『源平盛衰記』を中心に —

濱 中 修

木曾義仲の最期を語る合戦譚の中に、突如その姿を現した巴は、義仲へのけなげな情愛と、何よりも「いろ白く髪ながく、容顔まことにすぐれた」女性でありながら同時に「ありがたき強弓精兵、馬の上、かちだち、打物もッては鬼にも神にもあはうどいふ一人当千の兵者なり」という特異な人物造形により、我々の心を惹きつけている存在である。日本人の巴への関心の強さは、『平家物語』の享受から溢れ出し、謡曲「巴」「御台巴」「衣潜巴」「現在巴」「今生巴」、室町物語「朝ひな」、古浄瑠璃「ともえ」「巴太鼓」「大力女」等々の影響を生んでいくし、それは現在でも継続している。また全国各地に巴の墓と称する巴塚も語り伝えられている。このような巴への関心の持続はいつたい何に由来するのであろうか。本稿では、『平家物語』諸本の言説を比較することで、こうした問題を考える手掛かりを探っていきたい。

一 巴の活躍は、例えば覚一本では次のように紹介されている。

中にも巴はいろ白く髪ながく、容顔まことにすぐれたり。ありがたき強弓精兵、馬の上、かちだち、打物もッては鬼にも神にもあはうどいふ一人当千の兵者なり。究竟のあら馬乗り、悪所おとし、いくさといへば、札よき鎧着せ、大太刀、強弓もたせて、まづ一方の大將にはむけられけり。度々の高名肩をならぶる者なし。されば今度も、おほくの者どもおちゆき、うたれける中に、七騎が内まで巴はうたれざりけり。

逸早く平家軍との戦鬪で連勝を収め、都落ちした平家に替わって都の守護者となった義仲であるが、義仲軍の軍律の悪さ、貴族や後白河上皇との対立、鎌倉の頼朝との軋轢などの要因が重なって、今度は自分が朝敵となってしまう。宇治・勢多の防衛線を破られ、後白河院を奪取する計画にも失敗、六条河原での衝突にも多くの家来

を失った義仲勢は、乳母子の今井四郎兼平に合流せんと勢多方面に向かっていたところ、大津打出の浜で行き会うことが出来た。ここで兵力を三百余騎に整えたうえで、大勢力を誇る複数の鎌倉勢の中を突破していくが、戦いながら駆け抜けていくうちに、義仲主従はとうとう五騎になってしまう。

五騎が内まで巴はうたれざれけり。木曾殿、おのれはとうとう、女なれば、いづちへもゆけ。我は打死せんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど、いはれん事もしかるべからず、と宣ひけれども、なほおちもゆかざりけるが、あまりにいはれ奉つて、あつばれ、よかろうかたきがな。最後のいくさして見せ奉らん、とて、ひかへたるところに、武蔵国にきこえたる大力、御田の八郎師重、三十騎ばかりで出できたり。巴その中へかけ入り、御田の八郎におしならべて、むずととつてひきおとし、わが乗つたる鞍の前輪におしつけて、ちつともはたらかさず、頸ねぢぎつてすてンげり、其後物具ぬぎすて、東国の方へ落ちぞゆく。

このような巴の描写でも、彼女の魅力のおおよそは伝わるが、しかし、巴自身の情報、例えば彼女の出自、年齢、その後の人生などは黙して語らない。語り本系・読み本系を通じて、巴の事績を最も詳細に語るの『源平盛衰記』である。『源平盛衰記』において巴の記事が集中しているのは巻三十五「巴関東下向の事」であるが、

その概要は次のようである。

- 1 敗軍の木曾勢十三騎、三条周辺にて畠山重忠軍と遭遇する。
- 2 木曾方の一陣より進んで戦う一人の武者に、重忠が注目する。部下の言で、それが中原兼遠の娘にして今井・樋口と兄弟で、義仲とは乳母子である巴であることが明かされる。
- 3 重忠は巴を生け捕りにしようと挑むが、義仲は巴を討たせまいとする。畠山は巴の強さに舌を巻き、この場を去る。
- 4 四宮河原では、木曾勢は七騎となったが、この中にも巴はいた。生年二十八、身の盛なる女で、数々の戦場でも負傷しなかった。栗津の辺りで、巴は胄を脱ぎ、長い黒髪をなびかせる。額には天冠を当て、見目麗しい様である。内田家吉の勢三十五騎が巴を見つけ、その武勇・大力の評判に危惧しつつも挑む。
- 5 巴は先ず敵を督め、大將軍ではないにせよ、一陣に進むは剛の者だとして、軍神にその首を祭らんものと組み合い、これを討って首を義仲に奉る。
- 6 最期を覚悟した義仲は巴に戦場から去るように告げる。共に死をと訴える巴の言に同意しつつも、信濃の人々に最期の様子を告げ、後の世を弔へと命令する。
- 7 涙ながらに栗津から信濃に下った巴は女房公達にかくと語り、互いに袖を絞る。
- 8 鎌倉に召喚された巴は処刑されるべきところ、和田義盛の請いによってその嫁となり、朝比奈三郎義秀を産む。和田合戦の後

は越中石黒にて、主・親・朝比奈を弔い、九十一にて目出度く
臨終を迎えた。

そもそも巴の人物像を形成する上で問題となるのは、彼女の出自
であろう。これについて『源平盛衰記』は「アレハ木曾ノ御乳母ニ、
中三権頭ガ女、巴ト云女也。ツヨ弓ノ手ダリ、荒馬ノ上手、乳母子
ナガラ妾シテ、内ニハ童ヲ使フ様ニモテナシ、軍ニハ一方ノ大将
軍シテ、更ニ不覚ノ名ヲ不取。今井、樋口ト兄弟ニテ、怖シキ者ニ
テ候」と説明している。巴の出自について、語り本系はすべて黙し
て語らず、読み本系でも、延慶本は、「木曾は幼少より同様にそだ
ちて、うでをし頸引なむと云力態係組てしけるにも少も劣らざりけ
る」と幼少時代からの親しい仲であることを語るものの、依然とし
て巴の出自は曖昧である。『源平闘諍録』は「此の伴絵と申すは、
是れは樋口の次郎が娘なり。母は挿頭とて、木曾の美女に召し仕は
れけるを、樋口が子とも言はねども、人皆其の子と知りてけり」と
している。父の名を樋口次郎（兼光。中原兼遠の子）とするのは年
齢からして疑問であるし、義仲との関係もはっきりと乳母子である
とは明記されていない。

こうしてみれば、諸本中で唯一巴を義仲にとって乳母子としてい
る『源平盛衰記』の記事は注目に値するであろう。勿論、この記述
が事実である確証などはなく、他本にはないことからすれば、『源
平盛衰記』の突出的な表現、つまりは虚構と見る方が穏当であろう。
しかし、問題は、では『源平盛衰記』作者は何を意図して巴を義仲

の乳母子として造形したのか、ということへと移行して行かざるを
えない。ちなみに、今井四郎兼平を義仲の乳母子と設定するのは諸
本共通である。もし、巴が中原兼遠の娘であり、兼平とは兄妹で
あったならば、『源平盛衰記』は栗田の合戦の叙述に際して、一言、
巴と兼平との兄弟愛の言動・心情を述べるべきであったろう。この
ことが全く描かれていないことから、巴を義仲の乳母子とした理由
は、兼平との対称性を意図したものでなく、ひとえに義仲との関
係性において、その親しさを強調せんがためであった、ということ
はひとまず言えるであろう。

二

『源平盛衰記』以外の諸本においても巴の武勇・強力は十分に描
出されているが、盛衰記のみが語る特異な巴の戦場での姿がある。
それは軍神への祭祀の記述である。

都での合戦に敗れた義仲らは東を指して落ち行き、逢坂の関明神
を過ぎて栗津（現、膳所）辺りを過ぎていたが、そこに現れたのが
内田家吉の勢三十五騎である。義仲勢の先陣を進んでいてこれに遭
遇した巴は、「一陣二進ハ剛者、大将軍ニ非ズ共、物具毛ノ面白ニ
押並テ組、シヤ首ネチ切テ、軍神ニ祭ン」と思うや否や、馬を進め
る。両者ともに騎馬のまま素手にて組み合うが、内田が軍陣の作法
に反して、組合いの途中であるにも関わらず腰刀にて巴の首を搔こ
うとしたことを嘲笑って、「ヤラレ家吉ヨ、日本一ト聞エタル、木

曾ノ山里ニ住タル者也。我ヲ軍ノ師ト憑メ』トテ、弓手ノ肘ヲ指出シ、甲真顔、取詰テ、鞍ノ前輪ニ攻付ツ、内甲ニ手ヲ入テ、七寸五分ノ腰刀ヲ拔出シ、引アラノケテ首ヲ搔。刀モ究竟ノ刀也、水ヲ搔ヨリモ尚安シ。馬ニ乗直リ、一障泥アラリタレバ、身質ハ下ヘゾ落ニケル』とその首を獲る。その箇所、例えば覚一本では「武蔵国にきこえたる大力、御田の八郎師重、三十騎ばかりで出できたり。巴その中へかけ入り、御田の八郎におしならべて、むずととってひきおとし、わが乗つたる鞍の前輪におしつけて、ちつともはたらかさず、頸ねぢきつてすててンげり」ときわめて簡略に記述しているし、その首もそのまま捨てるのみである。これが『源平盛衰記』では「首ヲ持テ木曾殿ニ見セ奉レバ」と義仲にその首をわざわざ見せている。

『平家物語』諸本において、戦さに際して「軍神」に敵の首を奉るとする箇所は確かにある。

「宇治川先陣」において、宇治川を渡つた畠山重忠が、最初に遭遇した木曾義仲の郎党の長瀬重綱を討つ場面は次のようである。

畠山、今日の軍神にいはん、とて、おしならべてむずととつて引きおとし、頸ねぢきつて、本田二郎が鞍のとつつけにこそつけさせにけれ。(覚一本)

また、阿波国に上陸した義経軍が、勝浦の城を守る阿波民部重能の弟、桜間介能遠を破つた戦闘はこうである。

判官、ふせぎ矢射ける兵共、廿余人が頸きりかけて、軍神にま

つり、悦の時をつくり、門出よし、とぞ宣ひける。(覚一本)

このように、戦場において軍神を祭るという行為はさほど特異な事例ではなかつたらしい。しかし、勇猛果敢な女武者たる巴の戦闘場面で、このことを記すのは、語り本系・読み本系を通じて『源平盛衰記』のみなのである。他本が巴と軍神とを結び付けるといふことに想到しなかつたのに対して、『源平盛衰記』は巴に何がしかの宗教性を付与せんとしたのであらう。

右に引用した例からも分かるように、軍神を祭るのは、その日の戦さの最初の犠牲者の首によつてである。しかるに、義仲・巴らの戦闘はその当日の戦闘の最初の機会でもないし、京都から粟津に至る激しい戦闘の連続の中で、内田が敵方の最初の犠牲者とするのは疑問である。この局面で義仲勢が軍神を祭るのは、物語の軍事的進行の順序からして、必然性が薄いと云わざるをえない。これは、『源平盛衰記』が、巴に軍神を祭るといふ行為をさせることで、彼女の、強さ以外の性格を示したかったのであらう。

ここで、粟津の戦場での巴が身に付けた物の具についても、見ておこう。例えば覚一本では、巴の様子を次のように描く。

中にも巴はいろ白く髪ながく、容顔まことにすぐれたり。ありがたき強弓精兵、馬の上、かちだち、打物もつては鬼にも神にもあはうどいふ一人当千の兵者なり。究竟のあら馬乗り、悪所おとし、いくさといへば、札よき鎧着せ、大太刀、強弓もたせて、まづ一方の大將にはむけられけり。

『源平盛衰記』では、

巴ハ都ヲ出ケル時ハ、紺村紅ニ千鳥ノ冑直垂ヲ着タリケルガ、
関寺合戦ニハ、紫隔子ヲ織付タル直垂ニ、菊閉滋クシテ、萌黄
糸威ノ腹巻ニ袖付テ（中略）七騎ガ先陣ニ進テ打ケルガ、何ト
カ思ケン、甲ヲ脱、長ニ余ル黒髪ヲ、後ヘサト打越テ、額ニ天
冠ヲ当テ、白打出ノ笠ヲキテ、眉目モ形モ優也ケリ。歳ハ廿八
トカヤ。

としている。黒髪の描写は巴の女性としての美しさへの留意である
うが、「天冠」は何を意図したものであろうか。天冠は額に装着す
る金属製の装飾であるが、これを使用するのは幼帝の即位時、仏菩
薩・天人、競馬に騎乗する小童、神楽舞を舞う巫女、能の女神・天
女・官女、という具合に、宗教性を多分に帯びた存在なのである。

このように『源平盛衰記』は巴を描く際に、他の諸本とはや
や違った巴像を描こうとしているように見える。それがどのような
像なのかを考える上で参照すべきなのは、沖繩の「おなり神」信仰
である。今、伊波普猷の論文「をなり神考」を簡潔に要約した柳田
国男の文章^④によってその概要を示すこととする。

（一）沖繩諸島には最近まで、姉妹に兄弟の身を守護する霊力があ
るといふ信仰から、旅立ちに際して同胞女性の髪の毛、もしくは手
中などの持馴れた物品を、乞受けて持つて行く風習が残っていた。

（二）四百数十年前の神歌にも、また歴代の所謂琉歌の中にも、こ
の信仰と之に伴なふ幻とを詠じたものが幾つとなく挙げられる。

（三）この姉妹の霊を、古くは一樣にヲナリ神と呼んで居た。聞得^{きこえ}
大君^{おおきみ}は即ち国の最高のをなり神であり、実に又国王の御姉妹を以
て、之に任ずるのが本来の定めであつて、其職掌は本朝の斎王齋院
とよく似て居た。

一般の人々の間でのおなり神に対する気分がよく現れているおも
ろ歌^⑤としては次のごときものがある。

吾がおなり御神の

守らて、おわちやむ

やれ ゑげ

弟おなり御神の

綾蝶^{あやはへる} 成りよわちへ

寄せ蝶^く 成りよわちへ

旅に出る兄を守護しようと、おなり神たる妹が美しい蝶に化身し
て付いて来ているという美しいイメージを歌ったものである。

琉球国王の姉妹の中から任じられた聞得大君の場合には、その守
護の仕方がさらに先鋭化していて、戦場にまで赴くことがあつたら
しい。

聞得大君ぎや

初め軍 立ちよわちへ

合おて 行き遣り

敵 治めわちへ

鳴響^{とよ}む精高^{せだか}子が

戦場に女性が同行することは、ひとり沖繩のみに限定したことでは勿論なかった。神話時代の神功皇后から始まって、崇神天皇時に謀反を起こした武埴安彦の妻の吾田媛、日本武尊の東征に同行した折、荒れ狂う走水の海で夫を守るために自らを犠牲にして入水した弟橘媛等々。

おおよそ、危難に直面する男にとって、それが母であれ姉妹であれ妻であれ、家族の中の女性に、女性が持っているであろうと信じられていたその宗教的な力によって、自らの守護を希求するのはごく自然な感情といふべきであろう。

さてこのような、女性の宗教的な力を背景にした、戦場に赴く女性の事例を想起するならば、『源平盛衰記』が描くところの巴像も、より焦点が鮮明になるのではなからうか。義仲にとつて乳母子たる、すなわち擬似的な兄妹でもある巴は、額には天冠をいただいて、義仲の危難の場において誰よりも先頭にたつて闘いに赴き、敵の首はうやうやしく軍神と義仲に捧げる。

『源平盛衰記』が描く巴像は、このように宗教的な色彩が濃いのである。これらの諸要素が、他諸本にも揃って見られるのであれば『源平盛衰記』の特異性は指摘しえないのであるが、先にも見たように、これらの諸要素はこの本のみに集約して描かれているのである。

三

以上、巴を中心に、『源平盛衰記』における宗教的な描写の様相を見てきたが、次に『源平盛衰記』がどのような意図によってそうした記述をなしたのかを考えて行きたい。

『源平盛衰記』は、他の『平家物語』諸本よりは一層説話的・神話的な傾向があるが、義仲を巡る記事においてもそうした要素は確かに窺える。

俱利伽羅峠における平家軍の壊滅を描く場面を覚一本は、

次第にくらうなりければ、北南よりまはつる搦手の勢一万余騎、俱利伽羅の堂の辺にまはりあひ、衣籠の方立打ちたたき、時をどつとぞつくりける。平家うしろをかへり見ければ、白旗雲のごとくさしあげたり。此山は四方巖石であんなれば、搦手よもまはらじと思ひつるに、こはいかに、とてさわざあへり。

搦手だけではなく時を同じくして大手の義仲勢なども一斉に闘の声を合わせ、「前後四万騎がをめく声、山も川もただ一度にくづる」と思われ、浮足立った平家軍は我先にと俱利伽羅が谷へと下り、壊滅的な敗北を喫してしまったのである。

その同じ局面を『源平盛衰記』は、木曾軍の関の聲に平家軍が周章しているさなかに、次のような不思議が出来たと記す。

爰ニフシギゾ有ケル。白装束シタル人、三十騎バカリ、南黒坂ノ谷ヘ向テ落セ殿原、アヤマチスナノトテ、深谷ヘコソ打入

ケレ。平家はヲ見テ、五百余騎連テ落シタレバ、後陣ノ大勢是ヲ見テ、落足ガヨケレバコソ、先陣モ引返ザルラメトテ、不劣々々ト、父落セバ子モ落ス、主落セバ郎等モ落ス。馬二八人、人二八馬、上ガ上ニ馳重テ、平家一万八千余騎、十余丈ノ俱利伽羅ガ谷ヲソ馳埋ケル。

平家軍壊滅の重要な契機となつた白装束の三十騎の人々の正体は、後に次のように理解されたとされる。

三十人計ノ白装束ト見エケルハ、垣生新八幡ノ御計ニヤト、後ニゾ思合セケル。

即ち、俱利伽羅の合戦の前に、勝利を祈願した埴生新八幡の奇瑞であると記すのである。

『源平盛衰記』にはこのように、挿話をより神話的に誇張して描く傾向が見られるがこの場面もその一例なのである。しかしそれにしても、『源平盛衰記』が全体的な流れに対して全く無自覚に、単に挿話を面白くするために誇張をしているとは必ずしも断じられない。

おおむね、『平家物語』は木曾義仲を描写するに当って、三つの局面に分けていると捉えるのが普通である。挙兵から京都進駐までの初期は、大体において好意的な書きぶりである。京都を占拠している中期はその無教養ぶりや横暴さを暴きたてて批判的である。そして悲劇的な最期を遂げる後期は同情的である。

初期の場面における埴生八幡の神の奇瑞として、三十騎の白装束

の男たちを出現させていることは、義仲への埴生八幡の神の覚えのめでたさを印象付けるものであろうが、それは『源平盛衰記』のどのような狙いと関連するのであろうか。

義仲の挙兵に当って、覚一本は「義仲も東山、北陸両道をしたがへて、今一日も先に平家をせめおとし、たとへば日本国二人の將軍といはればや」、延慶本は「先祖の敵平家を討て世を取らばや」（巻六）、長門本も同じく「先祖の敵平家を討て、世をとらばや」（巻十二）と将来への夢を語らせている。

『源平盛衰記』は義仲への期待を兼遠に「末二八日本国ノ武家ノ主トモ成ヤシ給ハン」（巻二十六）と語らせており、他本に比してやや踏み込んでゐる。埴生八幡の神の奇瑞の踏み込んだ表現も、『源平盛衰記』の義仲への「日本国ノ武家ノ主」との認識から導かれたものであろう。

『平家物語』諸本において、義仲の悲劇的な最期を語る箇所では、読者がすぐ気付くのは、義仲自身は余り決然たる英雄としては描かれていない、ということである。その最も典型的な例は、義経軍が迫っている緊急の危難の中で、公家の娘と悠長に別れを惜しんで陸み続けている場面であらう。

余りの不甲斐なさに家臣の越後中太家光（覚一本。『源平盛衰記』は更に津波田三郎も諫死したとする）が割腹したことでもうやく戦鬨に復帰するのだが、六条河原で家臣団と合流した義仲は、先ほどまでの優柔不断とは別人のごとき演説をしたと『源平盛衰記』では

記す。

義仲申ケルハ、合戦、今日ヲ限トス。身ヲモ惜マン人々ハ、此ニテ落ベシ。臨戦場、逃走テ、東国ノ倫ニ笑レン事、当時ノ欺ノミニ非ズ。永代ニ恥ヲ胎サン事、口惜カルベシ、ト云ケレバ、行親、親忠等ヲ始トシテ申ケルハ、人生テ誰カハ死ヲ遁ン。老テ死ハ兵ノ恨也。其恩ヲ食テ、其死ヲ去ザルハ、又兵ノ法也トイヘリ。更ニ退者有ベカラズ、ト云（卷三十五）。

まことに武將たるに相応しい言葉で、義仲の人間性とその悲劇的な最期を準備する要素としても有効な言辭であるが、どうしたことかこの言葉を記すのは『源平盛衰記』と延慶本のみである。

また京都を落ちて来て、粟津で今井兼平と出会つた義仲は、『源平盛衰記』によれば次のような会話をしている。

義仲、兼平、馬ヲ打並テ宣ケルハ、河原ノ合戦ニ、高梨、仁科、根井モ討レヌ。身モ已ニ疵ヲ蒙テ、心疲力尽テ、進退歩ヲ失、為敵被得コト、名将ノ恥也。軍敗テ自害スルハ、猛將之法也ト申ケレバ、

ここでも義仲は、武運拙く敗れてしまった將たる者としての覚悟を吐露していて、見事な武將の片鱗を見せている。ところがこの言辭も『源平盛衰記』以外の諸本は記述がないのである。

義仲の悲劇性が際立つのは、今井四郎兼平との友情であり、さらに言えば氣落ちして弱気になっている義仲に対して「兼平一人候とも、余の武者千騎とおぼしめせ」（寛一本）の如き態度で主を激励

し守護するその言動であり、またその「今は誰をかばはむとてかいかさをもすべき。これを見給へ、東国の殿原、日本一の剛の者の自害する手本、とて、太刀のさきを口にふくみ、馬よりさかさまにとび落ち、つらぬかツてぞうせにける」という壮絶な自害であろう。この局面における義仲は、弁慶に庇護される「安宅」の義経にも似て、非力な貴種になっている。『平家物語』諸本は、義仲の悲劇性を、兼平の英雄的にして壮絶な死にざまから浮かび上がらせる方法を採用している。『源平盛衰記』も基本的にはそうした流れで物語を展開させているが、そこに、右に見たような、義仲の英雄的な面影を挿入している事実は見逃せない。

そのような義仲最期の局面で、『源平盛衰記』がひとり巴に宗教的な性格を付与し、あたかもおなり神、姉妹神（柳田の表現）のごとくに義仲を守護しているかのように描いているのはなぜであろうか。

兼平の英雄的にして悲劇的な死にざまは、裏側から義仲の英雄性・悲劇性を支える結果となろう。『源平盛衰記』において、まるで兄兼平と一対のごとくに描かれている巴が、宗教的なおなり神、姉妹神に類した存在として印象付けられれば、その守護される対象たる義仲はその貴種性、高貴さを増すこととなろう。それは、他諸本とは一線を画した義仲像を描き、また彼を「日本国ノ武家ノ主」と記した『源平盛衰記』の姿勢とも矛盾しないのである。

四

粟津の合戦で義仲と別れた巴はどうなったのか。『源平盛衰記』以外の諸本の場合を簡単に見ておこう。

其後物具ぬぎすて、東国の方へ落ちぞゆく。(寛一本)

そのまゝものゝぐぬぎすて、なくくいとまも申てとうごくのかたへぞおちゆきける。(百二十句本)

輓絵と云ふ女武者も、討たれや為ぬらん、落ちや為ぬらん、行方を知らず。(四部合戦状本)

輓絵は落ちやしぬらむ、被打しぬらむ、行方を不知なりにけり。(延慶本)

此とも多はいかゞ思ひけん、逢坂よりうせにけり。(長門本)

右のごとく、概してその後の事績については語っておらず、巴という人間自身には、粟津の戦闘以外の事柄には興味を示していないかのごとくである。

芭蕉の墓のある寺としても有名な大津市膳所の義仲寺に関して、江戸期の紀行文『改元紀行』に巴のその後を語る記事が見られる。

門の内の右の方に草庵の如きもの、是れ義仲寺なり。此の寺はもと巴御前の結べる庵なれば、古は巴寺といひしが、弘安の頃より義仲寺とよべりと縁起にはしるせり。

即ち、信濃に下ったはずの巴が再びこの地を訪れて、義仲を弔う庵を結び、巴寺と言われていたが、後に義仲寺と呼ばれるように

なつたとのことである。文中の縁起が「義仲寺略縁起」として今でも伝わっている。

略縁起は、義仲と兼平の最期を主に語っているが、義仲の最期の様子は、『平家物語』とは少し違っている。

義仲今はせんかたなく、此ま、自害とおほし召けるが、さるにても兼平はと跡ふりかへりたまふを、相模の国の住人、石田小太郎為久が放つ矢に内甲を手ひどく射させ、たまりもあへず馬上より落たまひぬ。御年三十一才也。兼平追付奉り、こはいかにくとなげくに甲斐なく事切れさせたまひぬ。かくて石田が良等、木曾殿の御頸給らんと深田に飛入る所を見て、兼平すかさず取ておさへ首かき取て、深田に踏こみ、扨御死骸をかくすべき所なければ、そこに有ける松の太木、力にまかせて、えいやうんと引ぬき、その下に御死骸をふかくかくし、その松の梢を切て手向の花に奉りしが、不思議や此松、根さしを生じ、今に至て御塚の側に繁茂す。

その後の兼平の自害の様子は『平家物語』と違はない。義仲の首を兼平が落とし、松の太木を抜いてその穴に埋めたという新たな筋立ては、勿論、義仲の供養のために建立された義仲寺として、その遺骸の必要性を感じたが故の変更であつたらう。「此松、根さしを生じ、今に至て御塚の側に繁茂す」という説明も寺社の伝説では珍しくはない。

略縁起は末尾において、巴がこの義仲寺を開創したと述べる。

かくて巴は木曾に下りけれど、重き仰を忘れざれば、建久の末の比、しのびて此所にきたり、御塚の側に草庵を結び、御菩提を弔ひ奉る。則當寺の始なり。さればいにしへは、巴寺といひしが、弘安の比をひより義仲寺と呼び侍る也。

一方、巴について最も詳しい記事を載せている『源平盛衰記』は、粟津合戦の後の彼女の運命について、興味深い伝説を語っている。すなわち、信濃に帰った巴が鎌倉に連行され、処刑されるはずのところ、彼女の強力という資質を惜しんだ和田義盛が貰い受け、怪力で有名な武士、朝比奈三郎を産んだというものである。

世静テ、右大將殿ヨリ被召ケレバ、巴則鎌倉へ參ル。主ノ敵ナレバ、心ニ遺恨アリケレ共、大將殿モ、女ナレ共無双ノ剛者、打解マジキトテ、森五郎ニ被預。和田小太郎是ヲ見テ、事ノ景氣モ尋常也、心ノ剛モ無双也。アノ様ノ種ヲ継セバヤ、トゾ思ケル。

明日頸切ベシ、ト沙汰有ケルニ、和田義盛、申預ラン、ト申ケルヲ（中略）即、妻ト憑テ、男子ヲ生。朝比奈三郎義秀トハ是也。母ガ力ヲ継タリケルニヤ、剛モ力モ并ナシトゾ聞エケル。

興味深い伝説ではあるが、これは年代が一致しないし、また吾妻鑑にもそのような記載はないことから、事実ではないと考証されている⁹⁾。

これは食欲に説話を吸収して多彩な話題を提供しようとする『源平盛衰記』一流の姿勢のなせるわざとも言えようが、また一面では、

英雄朝比奈三郎の誕生に、巴を参画させて新たな神話を創出せんとする同本の意図とも解しうるのである。

普通に考えれば、このような新たな結婚話は、巴と義仲との哀切な別離の後日譚としては、不似合いとも思われる。

しかし、『源平盛衰記』は先に描出した宗教的なる巴像に、更なる神話を付け加えたのであろうし、『源平盛衰記』の作者の理解ではそれは義仲との愛情と矛盾するものではなかったのだろう。

朝比奈の話は後に室町物語『朝ひな』¹⁰⁾においても取り上げられている。この物語が描く巴の姿は要約すれば次のとおりである。

三浦一門の朝比奈三郎義秀は力も強く心も勇猛な武士であったが、その資質も母である巴譲りであった。巴は木曾の住人中三権守兼遠が戸隠明神に申し子をして授かった子供である。戸隠の神は天手力雄命であり、巴は女子ながらも人に優れた力の持ち主であった。義仲は巴が十二三の頃からこれを寵愛し、その怪力や武芸をことの外重んじた。治承の乱れに際しては、越後の平家方、城助永を攻略する際に先陣を切つて活躍したのをはじめ、義仲をよく助けた。義仲の最期の戦闘の時は、巴は二十八歳で、わずか七騎になつてからも勢の先頭に立ち、遭遇した大力の敵内田家吉の首をねじ切つて、義仲に見せ奉つた。義仲からこの場から落ち行くように命令されて涙ながらに上の山へ登つて戦闘の終了を待ち、それから物具を脱ぎ捨てて、信濃に下つた。信濃では女房公達に最期のあり様

を告げ、義仲の菩提を懇ろに弔った。世が静まって後、頼朝からの召しよって鎌倉に赴いた巴は、処刑と決まったが、御所の特別当和田小太郎義盛は巴の姿形の優なるを見て、この大力の種を継がせたいものと思い、頼朝に懇願し、ようやくその許しを得る。やがてこの夫妻から生まれたのが、朝比奈三郎義秀であった。

信濃の戸隠明神の申し子としている点をはじめ、鹿狩り・大石・越後攻めなど、随所にこの物語作者の創作が散りばめられているが、朝比奈三郎の母を巴にする設定は勿論のこと、頼朝の反対に對して和田義盛が、祖父三浦大介義明の頼朝への忠義を持ちだして説得する部分などは同文的な類似を示しており、『源平盛衰記』を下敷きにしていることは動かない。

『源平盛衰記』は巴の晩年を次のように描く。

和田合戦ノ時、朝比奈討レテ後、巴ハ泣々越中ニ越、石黒ハ親シカリケレバ、此ニシテ出家シテ、巴尼トナリテ、仏ニ奉花^一香、主、親、朝比奈ガ後世弔ケルガ、九十一マデ持テ、臨終^二目出シテ終ニケルトゾ。

仏像に花香を手向け、義仲、親（中原兼遠）、朝比奈三郎の菩提を弔ったとされている。

この巴像は中世においては広く受け入れられたらしく、巴を扱った能はこの延長上に展開している。能「巴」では、粟津の里の、義仲を祀った神社に巴の幽霊が参る設定である。「御台巴」では、木曾の義仲の御所に帰った巴が、義仲の御台に義仲の形見を渡し、最

期の様子を語るところに、鎌倉からの使いの武者らがやってきたので、御台と公達を逃がすために、巴が奮闘している。

巴のその後を考える上で、興味深くまた重要な情報を提供しているのは文禄本『平家物語』¹¹である。

軀絵名残ヲシクハ思ヘドモ、理リナレバ、カラ及バズ、粟津ノ国分寺ノ堂ノ前ニテ馬ヨリ下リ、鎧脱捨落行ケルガ、後ニハ橋本ノ宿ニ遊君シテ居タリケルガ、和田左衛門ニ思ハレテ、浅井名ノ三郎ヲ儲タリトゾ聞ヘシ。

戦場から甲冑を脱ぎ捨てた巴が東海道筋の宿場橋本で遊女となっていたというのはおよそ何の根拠もない記載ではあるが、ただ「巴」の名称が、『平家物語』諸本では「巴」「軀絵」「伴絵」などとのみ記載しているのに、後世、「巴御前」の名で呼ばれるようになった理由の一端を暗示しているのかもしれない。静御前、虎御前など白拍子・遊君に御前の名で呼ばれる場合は多い。

おわりに

本稿で我々が読み辿ったような『源平盛衰記』中の巴像の理解に妥当性があるとすれば、その巴像は単に大力の男装せる女武者というにとどまらず、一族中の男性を守護する力を秘めた姫御前という印象を漂わせていると思われる。それは姉妹神・おなり神の信仰をかかって持っていたこの国の人々にとっては、懐かしく心地よい幻想であるに違いない。

『源平盛衰記』の巴像が能や室町物語の伝承に影響を及ぼしていることからすればそのイメージは孤絶していたわけではなからう。

姉妹ではなく妻であるが、巴と同様に闘いの場に伴われていた弟橘姫は、夫日本武尊を救わんがために海神の犠牲となつて海中に身を投じる。にもかかわらず日本武尊は王権を握ることもなく死んでしまう。

同じく「日本国ノ武士ノ主」たる野望を達成することなく亡んだ義仲ではあるが、その彼を女性としての力で守護し、また弔い続けた巴という存在は、一族の守護神といふべきであろう。粟津の合戦の描写を通じて、『源平盛衰記』は我が国の文学史上、稀有な人物像の造形に成功したと言えよう。そして、見逃せないことは、『源平盛衰記』は巴像を膨らませるに際して、単に巴なる特異な女性への興味だけで話を膨らませたわけではなく、義仲の人物像を、他の諸本に比してより優れた武将として描く構想の中で、この巴像を作りあげていったことである。

注

- (1) 覚一本『平家物語』。日本古典文学全集本に拠る。
- (2) 校注中世の文学『源平盛衰記』（三弥井書店）に拠る。
- (3) 『応永書写延慶本平家物語』（勉誠社）に拠る。
- (4) 柳田国男「玉依彦の問題」「妹の力」（『柳田国男全集』巻十一所収）。尚、細川涼一氏は「巴小論」の中で「しかし、『平家物語』に描かれた女武者と

しての巴の太刀は、義仲の「妻の力」であるよりは、柳田国男氏が姉妹に兄弟の身を守る霊力があると述べた「妹の力」（義仲は従者である巴にとつて主人であるとともに、身分は違うにも関わらず幼少より飲食等を共にして成長した兄妹ともいふべきものであった）に近いといえるであろう。そうであるがゆえに、義仲を「妹の力」によつて守護しきれなかった巴は、「泣く泣くいとま申して」（百二十句本）義仲のもとを去るのである。」としている（『女の中世 小野小町・巴・その他』日本エディタースクール出版部。一九八九年）。

(5) 外間守善校注「おもしろさうし」岩波思想大系。

(6) 細川涼一氏は「巴―大力の女の伝説」（『平家物語の女たち』講談社現代新書。一九九八年）で、平安期の女の例として女冠者や北陸の女騎を挙げている。なお、長崎県波佐見町の照日観音堂には、戦国期の大村氏と後藤氏の勢力争いの中で、大村氏側に属していた波佐見村への、後藤氏側の攻勢に対して、上野政広が同地を守っていたが、兄を助けて戦に参加して功績のあった妹の照日を観音として祀っている。照日はとくに呪文を唱えて怪異をもたらし、敵方を敗走せしめたと同地方の古記録は伝えている。「此政広の妹に照日と云ふ女あり、兄政広と共に後藤藤貴明を防ぎ戦あり、照日戦に望む毎に呪文を唱へて怪異を現す、因茲敵兵敗走す、元龜三年貴明大村三城を攻る時も、亦純忠照日に命じて呪文を唱へ敵兵を防かしむ、後此照日の霊を観音に崇め、照日の観音と号す、今内海の館屋舗と云ふ処に鎮座の観世音是也」（『大村郷村記』巻二十二）。

(7) 「改元紀行」『続帝国文庫』所収。

- (8) 「義仲寺略縁起」大阪府立中之島図書館蔵。
- (9) 水原一「巴の伝説・説話」(『平家物語の形成』加藤中道館。一九七一年)、細川涼一「女の中世 小野小町・巴・その他」日本エディタースクール出版部。一九八九年)など。
- (10) 東京大学国文学研究室蔵「朝日奈」。徳竹由明「東京大学国文学研究室蔵 奈良絵本『朝日奈』解題・翻刻」(『三田国文』第三十四号。二〇〇一年九月)所収。なお、巴の「産む女」としての性格を詳述した最近の論考としては、源健一郎氏の「巴の変貌―大力伝承の共鳴―」(『日本文藝研究』五十六巻四号、二〇〇五年三月)がある。
- (11) 文禄本『平家物語』。『平家物語 文禄本』(複製日本古典文学館。日本古典文学会編。一九七三年)。